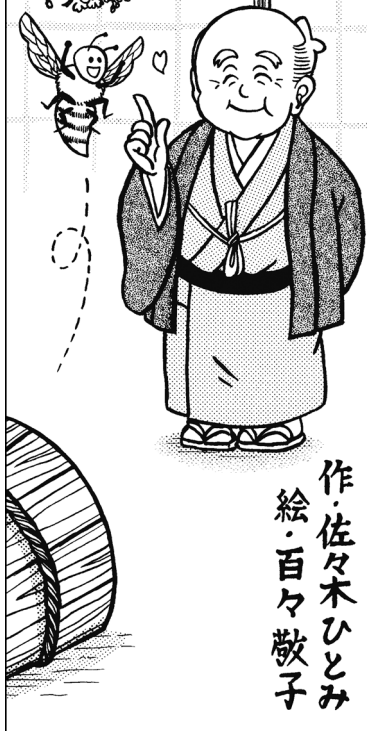


# 蜂の巣

## 長屋の

## お花見



作・佐々木ひとみ  
絵・百々敬子

少し昔のお話です。あるところに、風変わりなご隠居が住んでいました。前は大きな店の主人でしたが、今は息子に店を譲って、気ままな一人暮らしをしています。

ある日、庭先に転がっていた空き樽に、蜂の一家が住みつきました。暇を持て余していたご隠居は大そう喜んで、この樽を「蜂の巣長屋」と名づけました。

やがて迎えた春、楽しいことが大好きなご隠居は、お花見に出かけることにしました。

「お花見なんでものは、一人で行ってもつまらない。ここはひとつ、『蜂の巣長屋』の連中を誘ってみようかね」

ご隠居、さっそく樽に向かって声をかけます。

「あー、これこれ。誰かいないかね？」  
ところが、樽はしーんと静まり返ったまま。

「おーい、留守かい？ 留守なら留守と言っとくれよー！」  
しばらくして、蜂が一匹、そろりと出てきました。

「ああ、いたね。声をかけられたら、さっさと出てくるもんですよ。いいかい、よくお聞き。お前さんたちが住んでるこの樽、これはあたしの家のものです。つまり、あたしはお前さんたちの大家ってことですよ」

すると、蜂がびたりと動きをとめました。

「ふふ、驚いてるよ。まあね、大家と言っても、何もお前さんたちから家賃をとろうってんじゃないんだよ。今日はひとつ相談があるんだ。これからお花見に行こうと思うんだが、お前さんたちも一緒にどうだい？」

ご隠居がぐっと顔を寄せたものですから、蜂はびっくり。樽から飛び立つと、ご隠居の周りをブンブン飛びはじめ